

Love me do !

# 1 ある晴れた日の災難 ～美晴～

その日は晴れた日曜日で、私は特に用事もないし、のんびりするつもりで、九時を過ぎてもベッドの中でぬくぬくしていた。けれど、突然部屋の扉が開いて、ママの大声が飛んでくる。

「美晴ちゃん、いつまで寝てるの！ 早く準備しないといけないのに……。さっさと起きて美容院に行ってきてちようだい！」

な、何、どうなつてるの。今日つて、何か用事あつた？

「何よ、ママ。今日、何の日なの？」

「何つてお見合いよ、お見合い！」

はい？ もしかしてまだ夢の中なのかな？ なんで大学卒業を目前にして、お見合いなんてしなきやならないのよ、やつと就職も決まつたのに……。

「いいから、早く起きなさい」

「えつ、ちょ、ちょっと」

羽毛布団をはがされて、私は慌てて起き上がる。お見合いつて、そんなこといきなり言われても困る！

朝からお見苦しくてすみません。私、川嶋美晴、大学四年生。今年の春、大学を卒業予定で、就職先も一応大手商社に内定をもらっている。もちろん、このご時勢、たいした能力があるわけでもなく、学歴も平凡な私がそんな企業に就職できるのは、パパのコネのおかげ。パパはそれなりに名の知られた金融会社の社長をしているんだ。恋人は、残念ながら今のトコロなし。大学までずっと私立の女子校だったんだもん。出会いがないのは私のせいじゃないんだから！ でもね、きっと就職したらステキな人と出会えるはず……なんて、信じていたのに。

「お見合いなんて、ヤダ！」

とは言うものの……。強引なママに逆らえるはずもなく、私は美容院に連れていかれ、馴染みの美容師さんにきれいなアップにしてもらう。そして、誕生日にパパが買ってくれたお気に入りのピンクのワンピースに、成人のお祝いとして祖父母からもらったパールのネットクレスとピアスをつけた。

「まあ、美晴ちゃん、すごいかわいいじゃないの。さすが私の娘！」

ご機嫌なママをよそに、私は不機嫌極まりない。どんなにキレイな格好をしたって、今から行くのはお見合いでしょ。別にまだ結婚なんでしたくないし、そもそもお見合いで結婚相手の見つからない金持ちの三十代男性とかが来るんじゃないの？ ……いやだ、そんなの。

「きっと、長嶺さんも気に入るわ。こんなにかわいいお嫁さん、そうそうもらえるもんじゃないものね」

「ちょっと！ お見合いに行くのは仕方ないけど、結婚するなんて一言も……？」  
「今、長嶺さんって……？ もしかして、それって。

「長嶺さんって？」

「やだ、美晴ちゃん、あなた自分が就職する会社の社長の名前も知らないの？ お見合い相手は長嶺純希、社長の息子で、将来有望よ！」

長嶺総合商事株式会社。私が内定をもらっている会社で、パパがその社長とゴルフ仲間だつて聞いているけれど……。って、そこから来たのか、このお見合い話はっ！

「やっぱりヤダ、お見合いなんて行かないっ！」

「何言ってるの、もう時間になるんだから、今更そんなこと言わないの。ほら、パパもホテルで待つてるわよ」

「ううううう、どうせ気持ち悪いオッサンとかが出てくるのよ！ 御曹司なんて言つても若くてせいぜい三十五歳とかじやないの？ 私はまだ二十二歳なのにつ。

「まあ、美晴さんは四月からうちの会社にいらつしやるのね」

「そなんですの。まだ何もできない子どもでお恥ずかしいのですけれど、よろしくお願ひします。それに、この子つたらとっても奥手なものですから、今まで男性とお付き合いをしたこともなくて」「あら、女性はそのくらいのほうがよろしくてよ」

お見合いつて、本人同士はほとんど話さないモノなのがしら。ママは長嶺の奥様、つまり長嶺純

希なる人の母親と意氣投合して楽しそうに話している。そして肝心の長嶺純希は、無言でコーヒーを飲みあそばしているのだけど……。その容貌といつたら、そんじよそこの芸能人が裸足で逃げ出さんじゃないかと思うほどの、美青年。二十七歳だと聞いたけれど、もっと若く見える。色白で、奥二重の目は切れ長、鼻梁が細くて、顎のラインも細い。何なの？ なんでこの人がわざわざお見合いなんてするの？ 長嶺純希は私の視線に気づいたのか、こちらを見て少し微笑む。まるで、『お互い大変だね』と言うような笑みに、私はほつとして微笑み返した。そうよ、この人だって若いんだし、すぐに結婚したいわけじゃないでしょ！

「まあ、いけない。若いふたりが黙ったままで、ねえ？」

「純希さん、美晴さんとお庭でも見てらしたら？」

「ええ、では少し歩きましようか」

和風美青年、長嶺純希は、ゆつたりと美しい所作で立ち上がり、椅子を引いてくれる。一応私だって社長令嬢だし、多少のマナーは知っているけれど……。なんとなく、長嶺純希の優雅な動作に見とれてしまった。

お庭でも見てらしたら、とおっしゃいましたけど、まだまだ寒い一月、いくら若いふたりでも風邪をひきそうです。それにしても、長嶺純希は見れば見るほど優雅な人だ。なぜこんな人が、お見合いなんかしているんだろう。

「僕の顔に何かついてますか？」

「いえ、あの、きれいなお庭ですね」

「そうですね。花もなければ雪もない、まったく見所のわからない庭ですね」  
「はい？ なんかおかしくない、それ……。でもにつこり微笑まれるとツツコミにくい。

「あなたは僕と結婚してどうなさりたいんでしょう」

大変美しい笑顔ですが、何かこの人、棘とげがある気が。いや、私だって別に玉の輿に乗りたくてお見合いに来たわけじゃないし、結婚なんてしたくないから冷たくされてもいいんですけど。「僕はあまり家庭的な人間じゃありません、あなたとお話を合うとも思えません。もちろんそれでも、あなたが僕と交際をなさりたいとおっしゃるなら、お断りはしませんが」

「はあ？ 別に結婚も交際もしてくれなくていいですよ。そもそも私はまだ二十二歳だし、結婚する気なんて毛頭ないんです。今回は親に言われて仕方なく来ただけなので、そっちから断つてくれるなら助かりますっ」

何よ、社長の息子だかなんだか知らないけど、わざわざお見合いして、相手が気に入らなかつたら嫌味な発言？ 感じ悪すぎ！ 別に私は身売りにきたわけじゃないつーの！

「あれ、君もしかして……」

私の暴言に目を丸くした後、長嶺純希は私を見つめた。なつ、何よ、文句があるならはつきり言いいなさいよね。ところが彼は私に向かつて、軽く首をかしげて微笑んだ。

「じゃあ、君と結婚しようかな」

「はい？ あなた今、なんておっしゃつたんですか？ 口を開けたまま、何も言えないでいい

る私に、長嶺純希は手を差し出した。

「恋愛を前提に結婚することにしました。よろしく」

それが、私の災難の始まりだった……

## 2 政略結婚に恋の字はない ～純希～

結婚するとかしないとか、はつきり言つてそんなことはどうでもよかつた。けれど二十七歳にもなつて独身でいることに、母親が焦っていたのは知つていた。父は商社社長、祖父は会長、おまけに兄貴は三十二歳の若さで専務。経営も安定してゐるから、俺の結婚に社として何か期待があるわけじやないし、そもそも兄貴は既に結婚して子どももいるのだから、俺が急いで結婚する必要はない。長嶺家の次男、という自分の立場はわきまえているつもりだから、遊び相手には口の堅い女を選んできた。俺は恋なんて信じていない。タイミングや互いの要求が一致していることで落ちる『恋』なんて、所詮ただの錯覚。それを信じるつていう気持ちそのものも、やはり錯覚でしかない。そんなことに振り回されるのはまっぴらだつた。

「だったらお見合いなさい」

俺の持論を聞いた後に母親が言つた言葉はソレだつた。見合い？ この俺に見合いをしろと。  
「つまりは俺に見合うだけの女を用意してくれるつてわけですね、母さん」

面白い、だつたら俺に見合う政財界の令嬢をいくらでも連れてくればいいさ。俺はそのすべてに振られて、結婚のできない男として母親の野望を潰してやろう。結婚なんて、しなくていい――。俺は、本気でそう思つていたんだ。

そして晴れた日曜日。本日の見合いは、父親の知り合いの娘らしい。金融会社の成金令嬢サマ。見た目はそれなり、アップにした髪も艶があるし、姿勢もきれいだ。俺が微笑みかけると、彼女も品良く微笑み返してくる。

――これで十二人目、か。毎週のように見合いをこなして、いい加減女を見るのも嫌になつていた。いつそのこと、適当にどれかを選んで結婚したつていいのだが、どいつもこいつもお嬢様の皮を被つた馬鹿な女で、うんざりする。

わかりやすいのは、金と権力が好きな女。俺に結婚する気がないとわかると、あつさりと身を引いてくれる。そしてプライドの高い女も楽でいい。少し棘のある発言をするだけで、自らを守るために俺を『すっぱいブドウ』として片付けてくれる。厄介なのが、恋愛に夢見てる女。何考えてるんだか、俺の外見から『繊細で優しい人』というイメージを勝手に作り上げて、俺がそうではない面を見せると、自分は被害者みたいな顔をして涙目で俺を見る。

俺はもう本格的にうんざりしていた。だからその日も、川嶋美晴とかいう社長令嬢の釣書きなんて当然読んでいなかつたし、いつもどおりふたりになつたらさつさと追い払つつもりだつた。  
――だが、川嶋美晴は、俺が不羨な言葉を吐くと、結婚する気なんて毛頭ない、とのたまつた。

なんだ、この女。この俺と結婚したくないとはいひ度胸だな。そう思つた瞬間、去年の九月に採用面接に来たひとりの女子大生を思い出した。

ありきたりのリクルートスーツに身を包んだ彼女は、少し眠そうな顔で集団面接に参加していた。もともとコネで入社が決まっているからこそ、面倒くさそうにしているのだと思い、帰り際に声をかけてやつた。

『君はもう入社が決まっているから、適当にやつしていくのもいいのかもしれないね。ほかの子たちはあんなに一生懸命なのに』

そう言うと、彼女は「何言つてるんだ、コイツ」という顔をして、俺を眺めた。そして、微笑んだのだ。

『何か嫌なことでもあつたんですか？ 私なんかに八つ当たりして気が済むのならないのですが』俺はそれ以上の嫌味も言えず、呆気に取られたまま、彼女の後ろ姿を見送った。ただ金持ちの家に生まれただけの、馬鹿な女子大生だと思っていたのに、いい切り返しだつた。そう、あのときの女子大生が、今、目の前にいる川嶋美晴その人だつたのだ――

ああ、そうか。俺はやつと納得した。あのときの彼女だとしたら、俺を退屈させないでくれるだろう。どうやつても母親が俺の結婚を諦めないのならば、せめて面白い女を選ぶまでだ。どうせ、俺は恋なんてできない――。十八歳のときの傷が、今も俺を苛み続けている。

俺はどびきりの笑顔で彼女に微笑んだ。もちろん二十七年も生きているからには、自分のどんな姿に女性が喜んでくれるのかくらい把握している。

「じゃあ、君と結婚しようかな」

その言葉を聞いた瞬間、川嶋美晴は思いきり嫌な顔をした。そうか、そんなに嫌なんだ？ だつたら絶対、君と結婚してあげるよ。

『恋愛を前提に結婚することにしました。よろしく』

俺が差し出した手を握り返すこともせず、彼女は呆然と突っ立つていた。

そして来週、俺たちは結婚する――

「長嶺さん、悪いんだけど勝手に大学に来ないでくれます？ すごく迷惑です」

卒業式にわざわざ来てやつた婚約者に言うセリフとは思えないな。しかも恋の駆け引きではなく、

美晴は本気でそう思つているから素晴らしい。

『大切な婚約者を迎えて何が悪いのかな？』

「……それよ、問題は」

彼女の家の立場では、俺が結婚を望んでいるのを断るわけにもいかない。それなりに、自分の立場をわきまえている美晴は、断ろうという素振りさえ見せなかつた。自分の立場をわきまえることぐらいできて当然だが、それができない女が多いのも事実だ。

『なんであなたが私と結婚したいのか、私にはさっぱりわからないんだけど』

飾らない話し方も、明らかに俺を好きではない態度も、結婚を本気で嫌がる姿も悪くない。女の、ポーズだけの嫌がる言葉なんて、もううんざりだつた。

「さあ、なんでかな。君が俺を嫌がつてるから？」

「……사이트」

最低？ それで結構、君の旦那は最低男だ。それを最初から理解していれば、結婚生活はうまくいくんじゃないかな。

『美晴、レストランを予約してあるから早く乗ってくれるかな。君のご両親も来るんだよ？』

美晴は諦めたように俺の車に乗り込んだ。結婚を来週に控えているのに、まだ一度も手を出していない、俺の花嫁。お楽しみはこれからだ。せいぜい長く楽しませてほしいものだな。

「ほんっと、むかつくな！」

「君は本当に楽しいね」

美晴と美晴の両親には、とうに告げてあるが、俺たちは披露宴もしないし、結婚したことを公表もしない。

『社会に出たこともないお嬢さんでは、将来共に社を守り立てていくことはできないので、まずは社会経験を積んでいただきたい。だがビジネス推進事業部部長である自分と結婚していることがわかれば、普通の社会人生活は送れない。まずは結婚していることを伏せたまま、美晴さんには会社勤めをしてほしい。もちろん身内での結婚式はするし、その後も共に暮らして美晴さんを支えていきたい』

そう言つた俺に、誰も異論を唱えなかつた。まあ、俺の両親からすれば、結婚なんてしたくないところねていた次男が結婚するのだし、公表しないにしても式をして、籍を入れるのだから許容範囲なのだろう。

美晴の両親は——母親は心配そうな顔をしていたが、父親はさすがにそれなりの会社の代表らしく、余裕のある笑みを浮かべて、

『美晴が将来何もできない奥様になるより、ずっといい。純希君、娘をよろしく頼むよ』

と、即答した。

「何よ、こっち見ないでよね」

せつかくきれいな袴姿はかまそがたなのに、美晴は苛立ちを隠さない。本当に、美晴を選んでよかつた。もちろん、それは恋愛感情ではないし、美晴も、俺にそういうものは求めていない。

「俺が俺の婚約者を見て何が悪いのかな？」

「運転してるんだから、前見なさいよ！」

遊びがいのある、ゲーム。結婚なんて俺にとつてはそんなものだつた。

『恋愛を前提に結婚することにしました。よろしく』

確かに俺は彼女にそう言つたけれど、恋愛をするつもりなんて毛頭なかつたし、できるとも思つていなかつた。俺には誰かを信じることなんてできなかつたから。

### 3 きれいな顔には裏がアル ～美晴～

裏表の激しい御曹司。普段は優しくて穏やかで、所作もとても優雅だけれど、一皮剥むけば、意地悪で口が悪くて。

結婚式の準備をしていたときも、ブーケを選んでいる最中にいきなり耳元で――

『そんなに憂鬱そうな顔をしていると、ここで無理矢理キスするけど?』

囁く声は優しいけれど、その内容はひどすぎるつ! 確かに私はロマンティックな恋物語に憧れるタイプではない。けれど、ファーストキスぐらい多少の夢を見たつていいはずだ。だけどこのまま行くと、その相手はあのアクマつてことになるのよね。

「あーっ、もうやだっ、考えるだけでイヤっ!」

そのとき、携帯にメールが入る。アクマからの、連絡。

『今から迎えに行くから準備して』

……どこに行くのか、何をするのかも教えないで、どう準備すればいいのよ! しかも今から? アクマの勤める会社からここまで、車で二十分もかかるない。やばい、急がないと。私は慌てて化粧を直して、クローゼットから春物のワンピースを引っ張り出した。

『で、ここはどこなわけ?』

私は長嶺純希に連れられて、とある新築マンションの地下駐車場にいた。  
「美晴の新しい家だよ。この前言わなかつたつけ」「聞いてない!」

やれやれ、と肩をすくめると、アクマは私の肩に腕を回してきた。勝手に触らないでよ、こっちはあんたが遊んできた女とは違うのよ! 父親以外の男性とこんなに近づいたことなんてないんだからっ。

思い切り振りほどきたい衝動を、私はにつこりと微笑んで堪える。だってそんな行動を取つたら、アクマの思うツボ。仕返しに何をされるかわかつたものじゃない!

「美晴がおりこうになつてくれて、嬉しいような寂しいような複雑な気持ちだよ」

「……」

どうしろと! アクマの感情は人間には到底理解できません……

マンションの最上階。二十二階からの眺めは絶景。室内の内装と家具は、きれいかつシンプルにまとめられていた。

「……なんで?」

「ん?」

「なんで、内装も家具も、全部勝手に決まつてるので」

確かに色調も揃っているし、必要なものはすべてある。冷蔵庫も食器も、掃除機も、室内用洗濯物干しも、果ては調味料に、クローゼットの中には服に帽子にバッグ、引き出しを開ければ見たこともないセクシーな下着……!?

「美晴は結婚式の準備で忙しいから、俺が揃えておいたんだけど?」

「じゃあ、この黒い、ほぼ紐状のパンツはあなたが穿くのね?」

「これなら、美晴はほとんど荷物を移動しなくても暮らせるだろう? 実家には美晴の部屋をそのまま残してもらえばいい」

「……ひとつ尋ねたいんだけど」

「うん、なんだい?」

「それってもしかして、気遣いなの?」

思わず私は、背後に立つ長嶺純希に問いかけた。これで、私が喜ぶと思ったのだろうか。もし、もしも、何かの間違いでアクマがそういうつもりでやつてくれたのなら、感謝の意を示さなくてはならない。私だってそのくらいの礼儀は持ち合わせている!

「いや? 俺がこうしたかったからだよ」

「わかつてたわよ……」

さらに追い討ちをかけたのは、ベッドルーム。4LDKは、この年齢の新婚夫婦には豪華すぎるし、感謝する気持ちは私にだつてそれなりにあるのよ? だけど……

「このくらい大きければ美晴がどんなに転がつても落ちないよ」

「……そうね」

ワイドダブルのベッドは、低反発マットレスで、体のためにいいのでしょうか。だけど、ワイドダブルってことは、一緒に寝ろつてことよね!?

「長嶺さん!」

「何? 寝心地試してみたい?」

「違いますっ」

動搖している私を見て、とつても嬉しそうなこのアクマ! 私が言いたいことなんて、どうせお見通しなんでしよう?

結婚するのはもう仕方ないし諦める。でも、私たちお見合い結婚なんだし、いきなり一緒に寝るのはどうかと思う!」

平安時代は、初めて会つて暗くて顔も見えないままで、床を共にするくらいのこと、日本人はしきてきているはずだけど

「私は平成の人間ですっ」

今にも噛みつきそうな私の頭をぽんぽんとたたいて、アクマは美しく微笑む――

「なんなら、今すぐ楽しんでみてもいいんだよ?」

……今すぐ、舌を噛みたい気持ち。

結婚式も無事（？）終わり、新婚旅行は先送りにしていたので、とりあえず新居へと移動する。車を運転する長嶺純希は、何事もなかつたように、平然としている。

……私のファーストキスううううう！ 悔しい、今すぐ口をはずして新品と交換したい！ だけど、彼の唇は優しくてやわらかかつた……。思い出してしまった自分を叱りつける。もう一生思い出したくない。不覚だつた、アレは。

「何、百面相してゐるの」

「……なんでもない」

「俺とのキスがそんなに印象深かつた？」

的確な指摘に、思わず顔が赤らむのがわかる。なんでこんな男と結婚しちやつたんだろう！

一秒以内に離婚したい……

「美晴は嘘つきだけど、正直だね」

「嘘つきなんて、長嶺さんにだけは言われたくないんですけど」

どう考へても稀代の嘘つきは、あんたでしょ！ そのおきれいな顔も、やわらかい雰囲気も、優しい微笑みも、全部が嘘をつくために駆使されているじゃない。私なんて、マナーのための調整程

度だよ……

「ところで、いつまで長嶺さんって呼ぶつもり？」

確かに、いつまでも夫である人を苗字で呼ぶのはおかしいってわかっている。だからって、どう呼べど？

「君も既に長嶺さんはずだけど」

笑いを噛み殺しているみたいな声に、私はふいと顔を背ける。

長嶺美晴——。それが、今日からの私の名前。でも、仕事では川嶋を名乗るんだし、会社でもしあつたときに、いきなり名前を呼んだりしたら怪しまれちゃうでしょ！

「今後のことを考えれば、長嶺さんって呼んでたほうが便利でしょ」

「つまりベッドの中でもそう呼んでくれるってことかな」

頭の中が真っ白になる。結婚するということはそういうコト。それでも、一般的な結婚とは違うんだし、カラダの関係は免除してもらえる、そう思いたかった。

「先に聞いておくけど、今夜は当然してくれるんだよね？」

「し、しない……」

「妻の務めでしょ。俺の性欲を受け止めるのも」

性欲つて！ あのね、普通の夫婦は性欲のために夜の営みをするわけではないと思うの！ 愛情からくる行為でしよう。泣きそなくらい、絶望的な気持ちでいる私を横目で見て、長嶺純希はくつくつと笑う。何が楽しいのよ、このアクマ！

「いいよ、しなくて」

「いいの？ 本当に!? どうせまた、喜はせておいて何かたくさんでるんじやないの……？」

「いざれさせていただけると嬉しいんですけど、ね？」

わざとらしく優しい笑顔を浮かべて、彼は私を見る。その笑顔の裏にアクマが潜んでいようとも、

しなくていいならそのほうがいいつ。

「その代わり」

「そ、その代わり……？」

「純希って呼んでもらおうかな」

い、いきなりソレ？ 名前っていうのは大切なものだし、これまでの「長嶺さん」という呼び方にも愛着があるて！ ……でも、代わりにしなくていいつていうなら、努力するしかないのだけど。

「ほら、呼んでみて」

「じゅん、き」

「もつと」

「純希っ」

「はい、合格。これからはそれでよろしく」

左手をハンドルから離して、純希は私の頭を撫でる。これつてもしかして馬鹿にされてる!?

マンションに到着して、私はやつと息をついた。結婚式だけで、十分緊張したんだから！ 今夜

はゆっくり眠ろう……

「美晴、お風呂入る？」

「うん！」

お風呂、大好きですっつ。ゆつたりお風呂に入れば、気持ちも落ち着く、……よね？

——ところが。

「あの、何してるの？」

「ん、美晴とお風呂に入ろうかと思つて。ほら、美晴も早く脱いで」

「やつ、やだ！ しないつて言つたくせに！」

「しないよ？ でもスキンシップは必要でしょ。これからふたりで暮らしていくんだから」

「絶対やだあああああ」

ギリギリの妥協により、お互いまつちりタオルを巻きつけた状態で一緒にお風呂に入ることになつた。

「別に襲うつもりはないんだけど。俺がそんなにガツガツした男に見える？」

「だったら一緒にお風呂に入る必要なんてないじやない……」

「どうせ寝るときも一緒なのに。第一そこまで距離をとつて、結婚生活つてやつていけるのかな」

……そう、ベッドはワイドダブルサイズの大きなベッドがひとつだけ。床で寝ると言うのは簡単だけど、今日からずっと私はここで暮らしていくかなくちゃいけないんだ。それを考えれば、この極

悪御曹司の隣で眠ることに慣れなければならない。

湯船に浸かって、体が触れないようはじっこに寄つていてる私に、純希が右手を伸ばす。

……私は、このマンションの値段だつて知らない。両親のもとで、何ひとつ不自由なく暮らしてきたから、これから自分で生活を築いていけるのかも自信がない。しかも、夫である純希は私を愛しているわけでもなく、ただ面白そうだというだけで結婚を決めたのだ。

「何、泣きそうな顔してるの？」

「触らないでつてば！」

けれど私の抗議もむなしく、純希は私の頬に指先で触れる。濡れたあたたかい指。本当に、本当に不安でいっぱい、私は涙を堪えられなくなつてしまふ。涙がこぼれる直前に、両手で顔を覆うのが精一杯。政略結婚なんて、よくあることだつてわかってる。それでも少しくらい、私に心の整理をする時間てくれたつていいじゃない！

「よしよし、今日はお疲れさま」

純希は私を胸に引き寄せて、信じられないくらい優しく髪を撫でる。

「大丈夫、約束したからね。何もしないよ」

「うるさいなつ、あなたが全部悪いのに、優しくなんかしないでよつ」

「うん、ごめんね」

全然悪いなんて思つてないくせに、アクマは私に囁く。

「美晴は、俺を敵だと思つてるのかもしれないけど、そうじゃないよ。これからは俺が美晴の一番

の味方になつたんだ」

何が、言いたいわけ？　どうやつたら、あんたが私の味方だなんて思えるのよ。

「とりあえず、先に上がるから。美晴はゆっくり体を休めて」

返事もしない私を置いて、純希はシャワーで体を流すとバスルームを出ていった。ほつとするとはずなのに、なぜか少し寂しい気持ちになるなんて、今日の私は本当に弱ってるんだなあ……

川嶋美晴、本日より長嶺美晴になりました――

## 5 愛しの姫にお仕置きを（純希）

美晴をバスルームに残して、俺はひとりで先に部屋に戻る。濡れた髪をタオルで拭いて、冷蔵庫からビールを取り出すと、今日の美晴の姿が脳裏に浮かんできた。ウェディングドレスに身を包んだ美晴の、キスされた瞬間の驚きに満ちた顔――。白い肌が、一瞬で赤く染まり、美晴は俺を突き飛ばした。

『し、しし、し、信じられない』

美晴がキスもしたことがないなんて、俺からすればそっちのほうが信じられないことだつたけれど、子どもの頃から私立の女子校に通つてきたお嬢様だし、あの性格だから安易に男と付き合うこ

ともなかつただろう。ぱつと見、細くて華奢きらしやで色白はからしやで、優やうげなお嬢様ようじやうに見える、彼女——

初めてのキスは、誓いのキスではなく、俺だけがこつそり楽しめるようにしよう、と決めていた。本当ならば、帰宅してからするつもりだったのに、俺も堪こらえ性せいがないもんだ。思い出して苦笑してしまう。

両親や祖父母から離れたところで、美晴が冷たいミネラルウォーターを飲んでいる姿を見たとき、その細い体を自分のものにしたいと願つてしまつた。もちろん、今夜は許してやるけれど、あのときはウエディングドレスに身を包んだ美晴を、この腕に抱きしめたくて我慢できなかつた。緊張した表情の美晴の隣に立ち、家族がそばにいないことを確認して……

『美晴、口紅がはみ出てるよ』

そう言つて、俺は彼女の頬に手を添えた。美晴はおとなしく、触れられるままだつた。右手の親指で、彼女のやわらかそうな唇に触れる。本当は、口紅なんてはみ出てなかつたのは、わかるだろ？

『……っ、んっ』

そのまま、強引に唇を重ねた。最初から触れるだけで済ませるつもりはなかつたから、甘い唇を割つて舌を差し入れた。美晴は最初、俺を押しのけようとした腕に力を入れていたけれど、舌を絡め取ると、体の力がどんどん抜けていく——。最後には、俺の黒いモーニングコートを震える指でつかんでいた。たっぷり味わつて舌を抜き出し、俺は最後に音を立ててチュツと美晴の唇を吸つた。真つ赤になつた美晴の唇からは、口紅がほとんど落ちていたのだけれど——。そして、俺を突き飛ばし、あの言葉をのたまつたつてわけだ。

パタパタとスリッパの音がして、振り返ると洗面所から美晴が出てきたところだつた。上気した赤い頬、乾かしたばかりのやわらかそうな髪。

『美晴、ビール飲むなら冷蔵庫にあるよ』

俺が声をかけると、美晴は少し戸惑つたように俺を見つめてから、ぷいと顔を背けた。

「別に、飲みたいときは自分で飲めるんだから、気にしないでいいしつ」

意地つ張りな、俺の奥様。でも今日キスした瞬間の君はかわいかつたから、俺は十分満足してるよ？

「それより、なんでまともなパジャマがないのよつ。実家からやつぱり持つてくるべきだつた……」美晴はかわいらしいピンクのベビードールに、揃いのショートガウンを羽織つている。もちろん、それは美晴が選んだわけではなく、この部屋を整えるときに俺が選んだもので。

『似合つからいいんじゃないかな』

『こんなの似合いたくないっ』

白い足が、膝上十五センチくらいまであらわになるそのベビードールは、美晴に実際よく似合つているのだけれど、彼女は不機嫌ふきげんそうにしている。

『あんまり反抗的ほんめいだと、キスしておとなしくなつてもらうけど?』

『……サイテー！ 脅迫ごうはくするなんて、サイテーすぎるつ』

『あ、そういうこと言うんだ?』

「長嶺さんだつて、今日は疲れたでしょ。早く寝るべきだと思う！」

「……長嶺さんって誰のこと？ 僕？ それとも美晴？」  
はつとして、美晴が口元をおさえる。それとちようど同じタイミングで、後ずさつた美晴の背中が壁にあたつた。準備は整つたね？ 僕は、かわいい獲物を前ににつっこりと微笑む。

「純希って呼ぶのは、何を免れるための約束だつたか、忘れたのかな？ 僕の奥様は」「ちよ、待つて、待つて、純希、純希さんっ」

逃げようとする美晴を腕の中に閉じ込める。じたばた暴れる体から、ふわりと柑橘系の香りがした。ボディソープの香りだろう。

「そんなに俺に抱かれたいの？」

「違ううううつ」

「わざわざ長嶺さんなんて呼ぶから、お仕置きしてほしいのかと思ったのに、残念だな」  
わざと耳元で、美晴の髪に唇をつけながら話しかける。美晴は俺の腕に閉じ込められて、身動きできずにそれでも抵抗しようとしていた。

「やだやだ、離してよつ」

「だから、美晴はわかつてないなあ」

「何がよつ」

俺は腕を緩めて、彼女の顔を上げさせる。美晴は強い視線で俺を睨んだ。そうそう、そういう目が悪いんだよ？

「抵抗されると、躊躇<じゅうりん>したくなっちゃうつてことだよ？」

優しく美晴の背中を撫でる。俺の今の一一番のお<sup>お</sup>気に入り。かわいい美晴。だけど結構賢いはずの美晴。俺の言つてることの意味は、わかるよね？

「……き、気をつける、から」

「そうだね、気をつけて。じゃないと狼に食べられても文句なんか言えないよ」

「たつた一回じゃない……」

不満そうな彼女に、俺は微笑んだ。

「そうだねえ。じゃあ俺もたつた一回なら美晴のこと抱いていいのかな？」

「……ゴメンナサイ」

なんとかしてソレから逃げようと必死な美晴。結婚したつてことは、いずれは必ず抱かれるつて、まだわかっていないのだろうか。彼女を手に入れる日に思いを馳せて、心が震える。

「仕方ない。今日は疲れてるだろうし、見逃してあげるよ？」

俺がそう言うと、美晴はパッと明るい顔を上げた。わかりやすすぎて、笑いそうになるのを必死で堪える。

「でも」

俺は美晴の表情を楽しみたくて、わざと言葉を切った。

「……でも？」

不安そうに美晴が俺を見つめる。それなりにきれいな子なのは、間違いない。令嬢つぶりも板に

ついている。それでも俺に翻弄<sup>ほんろう</sup>されてしまう美晴、かわいそうにね？

「お仕置きは必要だよね」

指で、美晴の頬にかかる髪を払う。美晴は戸惑いの表情のまま、俺を見上げていた。

「さ、美晴、今日の復習を兼ねてもう一度キスしてみようか？」

「やつ、やだつ」

「やじやないでしよう？ 君が悪いんだから仕方ない。ほら、目を閉じて」

「待つて、待つて純希、なんかほかのお仕置きにしよう？ だって、キスってそういうものじゃないよ。お仕置きするためにキスするなんて変よね!?」

必死に俺を説得しようと、美晴がまくしたてる。別にほかのお仕置きでもいいけど、そっちのほうが美晴は困るんじゃないのか？ 俺は堪え切れず、クツクツと喉から笑いを漏らした。

「じゃあ、朝まで俺に抱きしめられて眠るのどどっちがいい？」

俺の奥様は、絶望的な表情で己の無力さを噛み締めておられました――

## 6 アクマの隣で目覚めたら ～美晴～

——睡眠不足、だ。本格的に体が重い……。そもそも、人と一緒に眠るなんて私は慣れてないのよ。あのアクマはきっと、相当な数の女性と眠つてきているんでしょうけどね！

それでも、一応自分が新妻であることは自覚している。結局アクマの要望どおり抱きしめられたまま眼つたせいで、体はどこもかしこも強張<sup>こわば</sup>っていた。私は純希を起こさないように気をつけながら彼の腕の中から抜け出す。朝食の準備をしなくては。ベッドのわきに立つて見下ろすと、眠っている純希は、いつもまとっている、人を近づけないオーラがみじんもなくて。なんだかいつもより、かわいく見える。

起きて一番最初にしたことは、着替えた。いくら私でも、あんな恥ずかしいベビードールのまま、朝食の準備なんてしたくない……。クローゼットの中にたくさん入つていてた服の中から、比較的地味なニット素材のグリーンのワンピースを着る。……まあ、地味に見えてもあるの純希が選んだのだから、それなりのお値段がするブランドなのもわかっているけれど。

あの極悪御曹司の金銭感覚は、どうなつているんだろう。確かにうちみたいなちょっと裕福程度の家とは違つて、長嶺のおうちはものすごくお金持ち。それでも彼は一応家を出て、ただの長嶺純希として会社勤めをしているんだし、あんまり贅沢ばかりはしていられないんじゃないのかなあ。私はそんなことを考えながら、台所に立つた。

ふふ、ふふふふ。

思わず笑い声が漏れそう……。ダイニングテーブルに並んだ朝食を見て、私はうんざりしてしまった。……だから、結婚なんでしたくなかったのに！ 大学在学中から、お料理教室に通っていた女の子たちを、尊敬する。

テーブルに並んだ料理は、焼きすぎて固くなつた目玉焼き、油でギトギトのベーコン、からうじて普通に見えるけれど味に自信のないコンソメスープ、レタスをちぎつただけのサラダ、不恰好に刻まれた果物が入つたヨーグルト……。

料理なんて苦手だし！　どうせあのアクマのことだから、私が料理もできないのを見て喜ぶのよ。じゃあ喜ばせてあげればいいじゃないのっ。

もう、今すぐここから脱出したい。そしてママが準備してくれたおいしい朝食を食べたいよ。

「おはよう、美晴」

そのとき、アクマがベッドルームからダイニングにやつってきた。

「お、おはよう」

「へえ、朝食作つてくれたんだ？」

「……できれば食べないでほしいんだけど」

「なんで？　美晴がせつからく作つてくれたんでしょう？　俺のために」

朝からおかしいくらいにこやかな純希は、パジャマのまま椅子に座る。黒いやわらかな髪は、少し寝癖ではねていた。アクマな旦那様にも人間らしい部分があるのね。

どうせ文句を言われるのだろうと思つていた朝食。だけど、純希は何も言わずてテーブルに並んだ料理を全部食べた。不味いと言われるのか、あるいは嫌味つたらしく「美晴はお料理も上手だね」なんて言われるのか、と心配していたのだけど……。いや、何も言われなかつことに、わざわざ不安になる必要なんかないつ。

……こうしていると、確かに物腰もやわらかいし、優しいし、顔だつてきれいだし、お金持ちだし、モテるんだろうな、なんて思つてしまつて。でもコイツはアクマなのよ!?　ほだされちゃ駄目、どうせこの極悪御曹司は、自分になびかない私が面白いからかまつているだけなんだし。そう、私がもし純希を好きになつたら、悲しいことにしかならない。愛してくれない人を好きになるなんてつらいだけだつて、恋愛経験のない私にだつてわかるもの。

「朝食ありがとう」

チユツと音を立てて、純希は私の額にキス、しやがつた。

そんな嫌がらせ、朝っぱらからしなくていいですっ！

7 マホウノコトバ（純希）

美人は三日で飽きるがブスは三日で慣れるらしい。そもそも俺は、女性の美貌<sup>びやう</sup>を外見のみで判断する人間を、あまり好ましく思つてないのだけど、ね？　ちなみに、我が奥様はどちらかといえば美人に分類されると思うのだけど、三日で飽きもせず、かといつて慣れもしない。

「いい加減ひとりでゆっくりお風呂に入りたいんですけど！」

結婚式以降、お風呂には毎晩必ず一緒に入つているのに、美晴は毎晩必ず同じ苦情を口にする。「どうしてもひとりで入りたいときは、仕事が始まるまでの間なら、日中に入れればいいよね？」

一 橫暴……

「そんなに褒められる」と照れるよ?」

かわいい顔しないでよ。ますますいじめたくなるでしょに。

相変わらずきつちりタオルを巻いて、間違つても落ちたりしないようにタブルクリップでとめた状態で、美晴は俺と一緒にバススタブの中にいる。白い肌はあたたまるとすぐに赤くなる。濡れた前髪を、細い指がかきあげる。そして、まつすぐに俺を見つめて、美晴は口を開いた。

「おの木綿着木説がどうの」

「料理教室」

「料理教室は通いたいのだけれど……」

大変言いにくそうにそう伝えると、美晴は少し視線をそらした。確かに美晴は料理がうまいとは言えない。それでも冷凍食品やレトルトを使わずに、一生懸命作ろうとしてくれている。実は、そのことで俺は少し美晴を見直していた。料理が下手なことを馬鹿にしているわけじゃない。俺の母親は、旧家の出身で、着飾ることや出かけることが好きな人だ。そのせいか、母親が食事を作ることはほとんどない。実際、実家の食事はシェフが作っているし、母親が作ったものを食べた記憶といえば、子どもの頃にクッキーを焼いてもらつたことくらいだつた。俺の今の収入で、シェフを雇うわけにはもちろんいかないけれど、それでも有名店のテイクアウトや、デパートのお惣菜で誤魔

「少し仕事に慣れてから、平日の夜のクラスに行つてもいい?」

۷۰۲

俺が頷くと、美晴は嬉しそうな顔をした。なんだ、本当に素直な子なんだな。「じゃあ、俺からもそろそろきちんととした取り決めを話してもいいかな？」

「ここで話すことでもないし、上がつてからワインでも飲もうか？」

美晴との結婚について知っている人間は社内でもわずかだ。上層部のごく一部の人間には、父から告知がなされており、結婚祝いも届いている。それと、美晴の直属の上司となる秘書課課長の竹下氏(たけした)にも説明済みだ。ただし、特別扱いはしないよう、きちんと伝えてある。まあ、美晴が驚くのが楽しみなので、仕事に関して説明するつもりはないけれど。

「それで取り決めて、何なの」

心配そうな表情で、美晴がワイングラスを手にする。先日結婚祝いにもらつたグラスだ。ワインは、昨日美晴と買い物に出た際に、青山のワインショップで見繕つた中の一本。二十本ほどまとめで購入した俺に、美晴は少し驚いていたようだつた。

「そうだね。俺たちの結婚生活について、いくつか決めておかないといけないこと、かな？」  
赤ワインを一口含む。以前にも何度か飲んだことのあるものだけれど、芳醇で酸味も強く、力強  
い味だ。

「俺から提案することは二点。これは提案と言つてはいるけれど、もう決定事項だと思つて聞いてほしい」

「言いながら、なんだか仕事中みたいな口調になつてしまつたな、と少し思う。湯上がりの美晴は、小さく息を呑んだ。

「まず、毎朝毎晩必ず愛してると言うこと」

「……はあ？」

あまりに気の抜けた返事に、俺は思わず笑い出してしまつた。いやー、美晴はそつけないわりにいいリアクションをするね。

「……それは、私が言えればいいってことなのね」

「そうだね。美晴は毎朝俺に愛してるとつて言つて。夜は俺が美晴に愛してると言うよ」

「政略結婚に、愛なんか必要ないんでしょう？」

美晴の精一杯の皮肉にも、俺の耳はまつたく痛まない。につこりと微笑んで、美晴の肩に手を載せる。

「政略結婚だからつて、愛をはぐくんではいけないなんて決まりはない、ね？ それに、将来生まる子のためにも、家庭に愛があるのは大切なことだよ」

「こ、子どもつて」

「そう、いづれ美晴には俺の子どもを産んでもらわなくちゃならないから」

今すぐ逃げ出したい——。そんな思いをばつちり顔に出している彼女が面白くてたまらない。な

んて素直な俺の奥様。

「……とりあえず残りのふたつを聞くわ」

「前向きな対応をありがとう」

結婚していることを周囲に明かさないこと、結婚生活を何より第一にすること。残りのふたつを

伝えると、美晴は真剣な表情で頷いた。

「あの、最初の項目だけ、明らかにほかと温度が違うと思うのだけど」

やはりそれが気に入らないらしく、唇を尖らせる。

「美晴は俺のことをサイラーの極悪非道、鬼畜の女たらし、アクマとでも思つてているのかもしれないけれど」

美晴の目がかすかに泳ぐ。……見事、大当たりか。確かにあまり事実とぞれていなければ、ね？ 俺はそれなりに美晴を気に入つて結婚したわけだから、愛のある家庭を築いていきたいと思つているよ？」

「……絶対、私で遊んでいるだけだと思うけど

的確すぎて、もう我慢できない。俺は笑い声を上げて、額に手をやつた。

「まあ、それも認めるよ。でもそういうことを踏まえても、美晴とうまくやつていけるように、考えていいるつてこと。だから必ず毎朝美晴は俺に愛してるとつて言つて。俺は毎晩言うから、ね？」

美晴は大きくため息をついた。頭の回転も悪くないし、状況への適応性もある。それなのに俺のことだけはどうしても受け入れられない美晴が、面白くて仕方ない。今まで、女に本気で拒まれた

ことなんてなかつたせいか逆にかまいたい気持ちでいっぱいになつてしまふ。

「あ、それともうひとつ、どうして結婚指輪をつけてないのかな？」

「だって、結婚していることは内緒にするように、つて」

「だとしても、左手の薬指にリングをつけることは、特別な恋人がいるつてアピールとして必要なことだよ。特に女の子の場合はね？」

美晴の白い指には、ひとつもリングがつけられていない。その手を握って、薬指の付け根あたりを親指で撫でる。

「ちよつと、くすぐつたいから！」

「ここに、俺からの愛の証をちゃんとつけておいて、ね？」

「愛の証つて！ そんなんじゃないでしょ、純希は私で遊んでるだけのくせにつ」

「うん、そのとおりだけど」

君が思うより、俺は意地悪で腹黒い。だけど君が思うより、君は素直で誠実だから。  
そんなかわいい君のために、俺がしてあげられることは？ 君の思いどおりにならない未来を、  
君に届けてあげることくらいかな。

## 8 暗雲ただよう配属先（美晴）

入社式の朝、私は新しいグレーのスーツに腕を通す。相変わらず、あまり上手とは言えないけれど少しはマシになつて……きているといいな、という程度の朝食を、純希と食べる。

「今日から美晴も社会人、か」

サラダをフォークで口に運びながら、アクマは感慨深げに目を閉じる。このマンションで純希と暮らし始めて二週間が過ぎたけれど、純希は朝晩の「愛してる」と、毎晩一緒に入浴すること以外は、特に何かを強要することもなく、私はわりと快適な生活を送っていた。

「社内では、川嶋さんだね。そのほうがまだしつくりくる、かな？」

「そもそも、長嶺を名乗ることがほとんどないもの」

結婚したからといって、特に長嶺を名乗る機会はなかつた。純希との結婚は対外的にはほぼ秘密にしているし。

「美晴は何時に出るの？」

「九時半から式だから、八時五十分くらい」

「俺は今日は早めに行くから、気をつけて行くんだよ」

「……今日は、つて、別に明日からも純希と一緒に出勤するわけじゃないんだから！」

「それはそうだけど、ね」

今日の純希は、薄いグレーのワイシャツに、黒を基調とした細いネクタイ、濃いグレーのスーツを着ていた。本当に、スタイルがいい人だと思う。顔そのものも確かに整っているのだけれど、純希の場合は全体の雰囲気が、ものすごく優雅なのよね。

「美晴？」

名前を呼ばれて顔を上げると、純希はもう準備を終えて、出かけようとしていた。

「あ、ごめん、ちょっとぼーっとしてた」

「いいよ、俺に見とれるのは仕方ないから」

「……違うし」

一応旦那様の出勤の際は、玄関でお見送り。玄関までついていくと、靴を履いた純希が振り返る。そう、ここで必ず必要な言葉があつて……。純希は何も言わず、私を促す。視線だけで、人を動かそうとするな！

「あ、いしてるよ、純希」

「うん、ありがとう」

「いつてらっしゃい」

「いつてきます。美晴も今日は頑張つて。薬指のリング、はずさないよう、ね？」

純希は満足して玄関を出ていく。どうしても、この朝の必須事項「愛してる」だけは慣れない。あのアクマは言い慣れてるらしく、毎晩眠る前、簡単に口にしてくれるけれど！ 私はあいつと違

つて、恋愛経験もないですからねつ。

「さて、私も準備していかなくっちゃ」

入社式が終わって、配属発表を受けて。

——私は、自分の配属先にかなり危機感を感じていた。

秘書課。……秘書って、ナニ。いや、意味はわかるけど！ 私ははつきり言つて、英語が堪能なわけでもないし、秘書検定何級とやらを持つてゐるわけでもない。なぜに、私が秘書課！ これがあのアクマの陰謀なのだろうということはわかつていただけれど……

私が入社した、つまり純希のいる長嶺総合商事株式会社では、部長職以上の人にはそれぞれ担当秘書が付く。なので秘書課に配属されているからといって秘書業務だけを覚えればいいというわけではなく、それぞれの担当役員の業務内容について専門的な知識を身につける必要があるらしい。しかし、秘書課なんて、きっと鼻持ちならないお姉さんたちの掃き溜めなんじやないだろうか。

私の不安は当然的中した。何を考えて、純希は私を秘書課になんて配属したんだろう……

秘書課がある七階でエレベーターを降りるとすぐに、フロアの雰囲気がほかの階と違つていてることがわかつた。営業や総務、システム管理課などは、人の声が絶えず聞こえていて、比較的騒がしい雰囲気だつたけど、七階のフロアはしんど静まり返り、どこからか花の香りがしていた。

「川嶋くん、こっち」

秘書課長である竹下課長——五十を少し過ぎたくらいの、穏やかというか人畜無害というか、なんとも華やかさから遠い上司に連れられて、私は秘書課に足を踏み入れる。竹下課長は私と純希の関係を知っている、数少ない人。彼は先ほどそれを説明して、私みたいな新人社員に丁寧に頭を下げてくれた。

「純希さんは大変聰明で実力があり、社内でも信望の厚い方です。今後業務にあたって、川嶋くんに対しても、ほかの社員同様に対応するよう指示を受けていますので、よろしくお願ひします」

……はい。何の実績もない、ただの新入社員の私がほかの社員と同様に扱われるのは当然のこと。それでも、こうして一言断ることが社長の家族である純希の妻への配慮なのだろう。

「あら、今年はずいぶん貧相な方がいらっしゃったのね」

「仕方ないわ、能城さん。川嶋さんはコネ入社なんですもの。そうですわよね？」

挨拶する前に、いきなりゴージャスな巻き髪の女性と、ショートカットの爽やかな笑顔の女性が私を見て話し始める。

「ほら、君たち、川嶋くんに挨拶してもらうから、静かに」

十名ほどの女性が、着席して私に注目する。それにしても、驚くほど華やかな人ばかり。秘書課つて、そういうものなの？

「川嶋美晴です。本日付で秘書課に配属されました。入社したばかりでわからないことも多いと思いますが、よろしくご指導ください」

頭を下げるとき、ささやかな拍手が起ころ。もう、嫌な予感しかしないんだけど……

「川嶋くんはしばらく、品川くんの下についてビジネス推進事業部部長の担当をしてもらいます」  
……なんか、聞いたことのある役職なんですか？ 間違いだと信じたい。だって、それはあのアキマの役職ですよね？

「課長、長嶺部長の担当は、昨年からずっと私が」

さつきのショートカットの女性が立ち上がる。けれど竹下課長は、それを制して言葉を続けた。「担当に関してはビジネス推進事業部から、正式な依頼をもらっています。長嶺部長のご意向ですので変更はできません。川嶋くんも、いいね？」

今の私に苦笑い以外にできことがありますか、神様。さつきは爽やかな笑顔を浮かべていたシヨートカットの女性が、いかにも悔しそうに私を睨んでいる。あの、できれば純希の秘書なんて、やりたくないんですけど……

「しばらくの間は、品川くんに指導をしてもらうようにね」

「はい」

「品川くん」

肩までのゆるいウェーブの髪を揺らして、ぱっちりした目の女性が立ち上がる。

「川嶋くんのこと、よろしく頼みますよ」

「はい、了解いたしました」

少し低い声、大きなアーモンド型の目、形の良い赤い唇。秘書よりも、モデルのほうがずっと似

合いそうな品川さんは、私につっこりと微笑んだ。

「私の指導に関しては少々厳しすぎる点もありますが、川嶋さんどうぞよろしくお願いいたしますね」「よろしくご指導ください」

絶対、いびられる……

「川嶋くんの席はその窓際のデスクです。あとは品川くんから説明を受けて、明日から業務に就いてもらいます。皆さん、よろしくお願ひします」

竹下課長がそう言うと、上品な声がそろつて、「よろしくお願ひします」と響く。

私、ここでやつていけるのかしら……

社会人初日、早くも暗雲が垂れ込め、頭上は真っ暗だつた。

帰宅して、夕飯の支度をしながら、私は純希の帰りを今までにないくらい、待っていた。聞いただしたことで頭の中がいっぱいなのよ！ ほんつつつとうに、アイツの秘書なんて遠慮したいつてば！ 秘書課のお姉さまたちは、私が純希の担当になつたことに大変ご立腹で、まともに話すらしてくれない。あんな中で、どうやつて仕事をしていけばいいのよ、ほんと！

失敗せずになんとか作れそうな、鶏肉の白ワイン蒸しを準備して、温野菜のグリルをオープンに入れたらとき、玄関のドアが開く音がした。私は小走りで玄関へ向かう。

「ただいま、美晴。わざわざお出迎え？」

「ただいまじゃないわよつ！ 何よ、秘書課つて、なんで私があんたの担当なのよ！」

「そんなに喜んでくれるなんて、嬉しいな」

「喜んでなんかないっ」

「まあ、落ちついて。それよりずいぶんいい香りがしてるね」

私の怒りなんてまつたく気にせず、純希は靴を脱ぐと私の横をすり抜け、ダイニングに向かう。絶対、絶対コイツのせいなのに。つ。

「美晴、おなか減つたから、早く食べよう」

ダイニングから聞こえてくる声に、私は小さくため息をつく。やつと純希との生活にも少し慣れてきたと思ったら、またしてもアクマの罠に陥れられる。

「この、極悪御曹司つづ」

私はきつく歯を食い縛りながら、あのアクマを蹴り飛ばしたい気持ちを必死で堪えていた……

## 9 昼間の秘書・夜の玩具？ ～美晴～

入社して一週間。さて、今日の美晴さんは……

「川嶋さん、このスケジュール表じやわかりにくいくらいじゃないかしら？ 長嶺部長がきっとお困りになるわよ」

「ちょっと川嶋さん、お茶を出した後はきちんと片付けていただきないと次の人気が困ります。さつ

さとなさつていただけない？」

「ねえ、川嶋さん、この銀座のケーキ屋さんで十五時に限定販売するフィナンシェを買ってただける？ 今日いらっしゃるお客様のお土産にお渡しするから急いでね」

長嶺部長、つまり純希の担当秘書となつたことが、お姉さま方のご不興を買つたらしく、ねちねちと面倒なことを言われ続ける日々、なわけで。

「川嶋さん、います？」

その上、純希は内線で呼びつけばいいのに、気軽に秘書課に顔を出しては用事を言いつける……、つてまた来た？

「あら、長嶺部長、ご無沙汰しております」

最初だけ爽やかな笑顔を見させてくれたショートカットの先輩——なまこはら 柳原さんが、ドアを開けた純希に軽く会釈して声をかける。

「やあ、柳原さん。今は専務の担当をしてるらしいですね。どうですか、専務の秘書は。僕のときより、こき使われているんじゃないですか」

にここにこと仕事用の笑顔を浮かべて、純希が柳原さんと談笑している。いいですね、御曹司様はお気楽で……。アンタのおかげで、私がどんな会社生活を送っていることか！ いや、きっと、想像はついているんでしようけどね。

「川嶋さん、この後打ち合わせに行くので、同行してもらいたいんだけど？」

イヤですと言える立場じゃないのはもちろん知つてはいるけれど、それでも私は抵抗を試みる。

「申し訳ありません。午後はお客様のお土産としてお渡しする、お菓子を買いに参りますので」「それはほかの人にお願いできないの？ 能城さん、どなたか手の空いてる方に行つてもらうよう手配してもらえませんか？」

能城さん——一番最初に私に声をかけてきた、あのゴージャスな巻き髪の彼女は、あで艶やかな笑みを浮かべて返答する。

「ええ、かしこまりました。ではこちらで手配させていただきます」

「は、はい、申し訳ありません」

慌てて頭を下げる私を、絶対純希は心の中で笑つてはいるに違いない。でも、この大変な状況のほとんどを純希が作り出してくれるってこと、わかっているんでしようね。

「じゃあ川嶋さん、色々説明したいこともあるから、今から来てもらいますか」

「はい、かしこまりました」

私は純希に促されて、秘書課を後にした。

純希専用個室、つまりビジネス推進事業部部長室に通されて、私は大きくため息をつく。

「秘書課は、ずいぶん楽しそうだね」

「……羨ましいでしよう？」

切り返しにも冴えがない。毎日あんな調子で、次から次へと雑用を頼まれる私の身にもなつてほしい……。

「午後の打ち合わせは、たいした時間はかからないよ。一緒に食事でもどう？」

「部長、私は仕事で呼ばれただけです。それ以外は申し訳ありませんがお付き合いできません」

会社でまで、純希の好きにされるわけにはいかないのよ！ それじゃなくとも、毎晩一緒にお風呂に入るとか、ひどい環境で暮らしてゐんだから、これ以上のストレスは不要。

「美晴の仕事は、俺の面倒を見ることだよ？ 俺が美晴と食事をしたいと言えば、当然食事に付き合つてもらうし、俺が美晴を抱きたいと言つたら……」

「ちよつと、どう考えてもそれはセクハラでしょ！」

「なんだ、ごまかされてくれると思ったのに」

嬉しそうに純希が笑う。何が嬉しいの、このアクマ！ ちなみに、当然だけど私たちにカラダの関係はない。そもそも、恋愛を前提に結婚しましようなんて意味のわからない言葉を言った純希自身が、私に対しても恋愛感情を一切持ち合はせていないんだから。つまり、夫婦の営みは一切ない結婚生活が続いている。だからといってただの同居人と言える関係でもない。

「とりあえず、打ち合わせが始まるから、美晴はお勉強のつもりで参加して」「……はい」

結局、純希の要望のままに、打ち合わせが終わると食事に連れていかれて、そのまま帰宅。……ちゃんと社会人をやれているとはとても思えない。私は玄関で、大きくため息をついた。

「どうしたの、そんなため息つかれたら、放つておけないよ？」

いきなり背後からぎゅっと抱きしめられて、私は必死でそれを振りほどく。

「ほつといて！ つていうか、ほんと純希のせい！」

「だつたらますます放つておけないね。一緒にお風呂に入つて、話を聞かせてもらおうかな」

……大好きなお風呂が、嫌いになりそう。なんでこのアクマは、こんなにも一緒にお風呂に入ることにこだわつてるの！

「ほら、美晴。準備しなくていいのかな？ それとも俺に脱がせてほしい……？」

私の肩をつかむ、純希の手。私はぐるつと大きく身震いして、その手から逃れる。

「自分で脱げるっ」

「じゃあ、お風呂に入ろうね」

——このアクマの手のひらの上で、好きに転がされているだけなのかも。私はぐつたりしながらバスルームへ向かつた……

そして今はバスタブの中。いつもどおり、純希と向かいあつて。

「美晴はいつまでたつても慣れないみたいだね」

私の腕を撫でながら、わざとらしく純希がつぶやく。ううう、触らないで、とも言いにくいつ。まあ、なんだかんだ言つて、結婚式の後のキス以外、私に手を出さないでいてくれる純希には、多少感謝してる。多少、ね？ 結婚しているのに、いつまでもそういうコトをしないつていうのが、おかしいのはわかる。ただ、私たちの結婚そのものが普通とは違つてゐるのも事実だし！

純希は撫でていた私の腕をつかんで、自分のほうに引き寄せる。私は体を反転させられ、純希の胸に背中を預けるようにして抱きしめられた。こ、こんな露出度の高い格好で、こういう密着はまずいと思うつ。抗議の声を上げようとしたとき、純希が少しほほとしたように息を吐いた。

「ちょっと疲れてるんだ。少しだけ、このまでいさせて」

「う……ん」

裸の肩を純希の腕がすっぽりと包み込んでいる。細いけれど、私とは全然違うオトコの腕。私の右肩に、純希が額をつけた。私は左手を伸ばして、そつと純希の頭を撫てる。いつも気を張つて、『長嶺純希』を演じている彼には、彼なりに疲弊する何かがあるのかもしれない。

「優しいね、美晴。このまま、俺のものになる？」

「なりません」

「……残念」

心臓がバクバクと激しく脈打っているのは、決して純希のせいじゃない。お湯が熱いのと、男の人とこんなに密着するのが初めてだから、だよ！ こういう言い方をすると誤解を受けただけど、これは相手が純希じやなかつたら、絶対無理。純希は、一応私の夫で、私が本当に嫌がることをしないつて、私だつてわかっている。だから、平気なだけなの！

「ちょ、ちょっと!?」

首筋に、何か生暖かい感触がつ。純希がその部分に唇をつけて、軽く舌を動かしているのがわかる。「感じてるんだよね？」

「違うわよ、馬鹿つ」

「そ、うかな？」

キツく吸われて、私のカラダは私の意思に反してビクンと震える。

「美晴は色が白いから、すぐ痕あとがついちゃうね」

笑いを含んだ純希の声が、耳のすぐ近くで聞こえる。やだ、なんかカラダが熱くて、少しおかしい。湯あたりしてる、かも。

「や……」

「そんなかわいい声出さないでよ。我慢するのがつらくなるでしょう？」

何を、とは聞けない。純希は私と結婚した後、ほかの女に手を出すことはしていない、って言つてた。つまり、それつて――

「純希、ダメ……」

「わかってる、まだしないよ。でも少しだけ、美晴に触さわりたい。そのくらいは許してくれてもいいんじやないかな？」

それを許して、本当に途中でやめてもらえるものなのか、私にはわからない。男の人つて、そこらへんどうなの!?

「ねえ、美晴」

「待つて、待つて純希、本当にダメだと思うの！ だつて、ほら、男の人は途中で止めるのもつらいっていうでしょつ」

胸に伸ばされた手をつかみ、私がそう言うと、純希はくすくすと笑う。何よ、なんで笑うのよ。

私の言つてることって、何か見当違い？

「俺に触れるのが嫌だから、駄目つて言うんじゃないんだ？」

「あ……」

言われて、自分でもびっくりする。こんな男に触れられるなんてイヤ、とか、そういう気持ちはなかつたかもしれない。

「それはいちいち言わなくとも、もうわかっていることでしょ！」

でも意地を張るしかない。だつて、純希と密着していても、イヤだと思わなくなつていてるなんて認めるわけにいかないんだ。純希がそばにいるのが当たり前になつてきてる、なんて、そんなことを認められないつ。

「じゃあ、直接触れないから、ね？」

「えっ？」

きつちり巻いたバスタオル、ダブルクリップでとめてあるその上から——。私の胸を、純希が優しく揉む。

「だ、ダメ……」

「少しだけ、だから」

「す、少しならいいつてもんじやないつ」

「じゃあ、いっぱい？」

こらこら、そんなかわいく言つても、アンタがアクマなことはわかつてゐんだからねつ。なのに、純希が珍しく弱つてゐるところを見せるから、私は思い切り彼を拒絶することができない——。それだけ、そう、それだけの理由なんだから……。

## 10 消せない過去と祈らない未来 ～純希～

疲れていたのは、別に美晴のせいじゃなかつた。仕事で、かなり無理な要求をされて、それをかわすのに苦労していた。

——相手が、悪すぎた。確かに、俺はその取引先に負い目を持つていた。だからこそ、『彼』は俺にその話を持つてきたのだということはわかつてゐた。けれど、まだ——

俺は、『彼』の思うとおりに動くわけにはいかなかつた。俺が結婚したということを、『彼』はもちろん知つていた。だから、俺にその話を持つてくるとしたら今しかないとすることを、俺も『彼』もわかつてゐた。

美晴が抵抗しなかつたことが、胸に沁みた。美晴のことをかわいがつてゐるけれど、それは恋愛感情ではない——それは、誰よりも俺自身が知つてゐることだつた。

「純希、そ、ろそろ、やめないと……」

美晴のやわらかな胸を両手でタオル越しに撫でさする。そのやわらかさが心地よくて、俺は彼女の体から離れることができない。

「もう少しだけいい？」

「……う、じゃあ、もう少しだけ」

何かに感づいているのだろうか。いつもなら体に触れられることに抵抗する美晴が、今日は俺の腕の中にいる。やわらかな体はひどく小さくて、俺の腕の中にはすっぽりと収まってしまう。

「……っ」

声を出さないよう、美晴が必死で堪えているのがかわいくて。俺はタオルの内側で張り詰めている胸の先を、指先で弾く。

「や……ッ」

腕の中で、彼女の体が跳ねた。今まで、誰にもこんな風に体を預けたことのない美晴。まだ、抱いてしまうわけにはいかない。自分の疲労を癒すためだけに、美晴の初めてをもらうのは、あまりにもつたいなかつた。だけど、もう少しだけ……。張り詰めた小さな突起を両手でそれつまみあげる。タオル越しでもわかるほどに、美晴の体は反応していた。

「美晴、……気持ちいい？」

「……っ、じゅ、んき、やめて」

やめてと言いながら、俺の腕を振り払うでもなく、ただ肩を震わせて感じている美晴——。このまま、抱いてしまいたいという思いが胸に込み上げる。滅茶苦茶にしてしまおうか？

この素直な魂が、俺を傷つける。そう、それは最初からわかつていたことだつただろう？ 面白がつて美晴を入れようとした。それと同時に、俺は美晴をそばに置くことで自分が傷つくことを楽しんでいた。

無理矢理、美晴を抱いてしまえばいい。どんなに泣いても暴れても、押さえつけることくらい簡単だ。この体を押し開いて、俺の欲望で貫いてしまえば——

俺は、それで楽になるのか？

……ならない。わかっているのは、一瞬の快樂に身を任せても何も解決しないということ。

「ね、もう、やめよ……」

弱々しい声で、美晴が懇願する。そうだね、今日はこのあたりにしておこうか、と微笑めばいい。自分がすべきことはわかっているのに、それができず、俺はただ美晴の体を抱きしめる。この腕に閉じ込めて、二度と誰の目にも触れさせずに、俺のものにしてしまえばいい。その気持ちが、この黒い心を占拠してしまう前に、手を離せ。

「美晴、お願ひがあるんだけどいいかな？」

自分の声が、まるで他人の声のように響くバスルーム。彼女の体をそつと解放して、俺は美晴を見つめる。上気した肌、荒い呼吸——。何もかもが俺の欲望を刺激する。美晴が悪いわけじゃない。そんなことはわかっているのに——

「キスして」

きつと美晴は、拒絶する。それがわかっているのに、俺は美晴を見つめた。理性の光が鈍くなつ

た彼女の瞳が、俺を見つめている。そしてお互に引かれあうように——  
ゆっくりと、唇が、重なる……。あたたかいその感触が、俺を責める。

『あなたは一生私から逃げられない。どんなにあなたが私を愛しているか、あなたはきっとわからぬのね。大丈夫、それでいいのよ。だって私が愛しているのはあなたじやなくて、私自身だから。私から、逃げられないあなたを、ずっと見ていてあげるわ』

『彼女』が残した最後の呪縛——。俺は、まだあの夜から抜け出せないままでいるのだろうか。だから、『彼』が現れたことでダメージを受けている?

「……純希、わ、たし」

美晴の声で、はっと現実に引き戻される。

「気持ち、わる……」

「おい、美晴っ」

彼女が俺に体を預けるように倒れ込んでくる。あまりに長くお湯に浸かつていて、俺はやつと気づいた。

心に蓋をする。何も言わなければ、永遠が手に入ると錯覚していた。あれは、十八歳の俺——。大丈夫、もう一度心に蓋をすればいいだけだ。

ぐつたりして意識を失いかけている美晴の体から、バスタオルをはがす。本来ならば、たっぷりと堪能したい美しい体だけれど、そんな状況ではない。濡れた髪と体を軽く拭いて、裸のまま彼女をベッドへ運ぶ。赤い頬をした彼女は動けず、俺のなすがままだつた。ベッドルームの窓を開けて

しばらくすると、汗がひいて、顔色も戻ったので、俺は冷蔵庫からミネラルウォーターを持ってきた。  
「美晴?」

返事はない。眠ってしまったのだろうか。キヤップをはずして、ミネラルウォーターを口に含む。そして美晴の唇に、そつと口付けた。隙間からゆっくりと冷たい液体を流し込むと、美晴は喉を小さく上下させた。水分をきちんととらせておけば大丈夫、ただの湯あたりだ。数回繰り返したところで、美晴が目を開ける。

「大丈夫? 気持ち悪くない?」

「うん、大丈夫……」

「このまま休むといい」

そう言うと、美晴は弱々しく微笑んだ。そしてまた目を閉じる。こんなになるまで、我慢させたきつと俺は、君を誰よりも傷つけることができる。俺が君を大切にしたいと願っているのも本当なのに。

明日、美晴が目を開けたときには、いつもどおりの君の夫でいられるはずだ。軽口を叩いて、美晴を怒らせて。美晴がこつそりとアクマと呼ぶ長嶺純希に、明日には戻るから。だから今だけ弱い俺を許してほしい。

俺は、ベッドに腰かけて手を組んだ。祈りなんて、何の意味も持たないことを知っている。だから俺はただ目を閉じて時間が過ぎるのを待っていた——

## 立ち読みサンプル はここまで